

四 吉原の小歴史

吉原の遊郭いづくわくを新吉原と云ふのは明暦めいれきの大火から今の處へ引ひこんだ故に新と云ふ字を附て呼ぶのである。これから一寸吉原の歴史を話さねばならぬ。天正十八年八月朔日てんしやう、徳川家が江戸に始めて入部にぶぶになつてから段々諸方の町人などが江戸に入り込んで来て追々傾城屋おびくが出来て来た。慶長の中頃けいぢやうになつては將軍家の御座所ござしょと云ふことになつたので江戸は更に急點直下きふてんちよくの勢で繁昌はんじやうの度を増し方々に色町が出来て中々盛んな勢であつた。其の色町の中で麴町かろぢまちの八丁目には十六七軒あつた。これは京都の六條ろくぢやうから来たのである。京都の六條には今は色町はない。六條はいつしか廢すたつてしまつて、島原に移り、今では島原も寂さびれて祇園邊ぎをんへんが盛りであるが、其頃までは六條の色町が盛んであつたと見える。麴町の女郎屋ぢやうぢやうやは即ち六條の傾城町けいせいの outlet である。それから鎌倉河岸がしに十四軒あつた。これは駿府すんぶの彌勒町みらくから来たのである。著者は駿河に住んで居たから彌勒町の女郎屋ぢやうぢやうのことは知つて居るが、其處そこには今でも女郎屋がある。土地の人は二丁目といつて居る。其土地の言傳いひつたへに、昔此處ここの女郎屋は盛んなものであつて町が七丁目あつた。所が其町そのの中の五丁が江戸へ引越して、残つたのが二丁目であつて、吉原は則ち其五丁目である。それ故花川戸はながわの助六すけろくの狂言にも花ふりかゝる五丁目といふ文句があるなど、云つて居る。これは取止とりとめのない間違まちがひの話であるが、彌勒町から女郎屋が江戸へ引越して往つたことだけは事實であらう。それから大橋の内の柳町にも二十軒ばかり傾城屋があつて段々盛んになつた。其頃の遊女いづしよの風といふものは今とは大分變かはつて居て、小舞こまひや、亂舞らんぶを習ひ、茶の湯、數寄すきの道に心懸け、中々高尚なものであつた。今で云へば芳町よしぢやう、柳橋やなぎはしの藝妓げいぎのもつと品の善い、もつと行儀のよい、さうして其時

一 入部 領主となつたものが初めて自分の領地に入る事

二 傾城屋 女郎屋。遊郭

三 數寄の道 風流の道

代の貴女らしい技藝をさへ持つて居たものと思へば間違ないから決して尊いものではないが、しかし今日の女郎の様な下品のものではない。それ故に祝儀或は不時の催しなどには歴々へも召され、給仕も致し、老中などが同役の屋敷へ寄つて天下の政事の相談をする時も傾城を呼んで茶の給仕をさせたことである。今の人が藝者が御茶を挽くなど、云ふが、それは其時傾城を召んで、其手前で茶の會を催したことのある時の言葉が自然残つて居るのであらう。今日から見れば女郎に茶の給仕をさせて、天下の大政を議すると云ふことは不思議のやうな話であるが、其時分の人情から推して考へれば別段不思議はない。今日でも待合で天下の政治を相談するなど、云ふ説もある。何とか云ふ大政治家が、何とか云ふ日本一のお寺に参詣するときは、其政治家の御寵愛の待合の女將とやらが御件をしてやつて来た。そして其政治家が一縣の歴々を集めて、其女に酌とらせながら天下の政事を滔々と議論したなど、いふ珍談もある。(作者此文を草せし時、長野に在り伊藤侯善光寺に参詣す) 今から百年もたつて此事を記すものがあれば、昔の老中が傾城に茶の給仕をさせて政治の相談をしたのも別段異例の不思議ではないと思はれやう。それから此傾城の外に其頃江戸には風呂屋者と云ふものが大流行であつた。寛永の時分にも神田佐柄木町、雉子橋町の續きに堀丹後守の屋敷があり、此邊にも風呂屋が多くあつて、美人の湯女を抱へて置いて大層流行した。丹前風など、云ふ洒落た鬚の結ひ方は此處から流行出したと云ふことである。風呂屋者と云ふのは今ならば下町邊に居る高等賣淫の類であらう。

しかるに斯様に遊女屋や茶屋者の類が、江戸の町中に散つて居ては何うも取しまりの爲めに悪いと云ふので慶長十七年に庄司甚右衛門と云ふ者が、江戸中の傾城町を一つ所に纏めたいと云ふ

四 待合 待合茶屋の略。客が藝者を呼び入れて遊興・飲食をする場所。

五 伊藤侯 伊藤博文。

ことを願ひ出した。成程尤もの願であること云ふことで元和二年三月に傾城町に取立つべき場所一箇所を下された。其處は今の葺屋町の端の其頃は蘆などの一面に生えて居た所であつた。吉原と云ふ名は此處から始まつたのである。此處の處を二町四方町奉行から渡して遊女屋はすべて此處にまとめることになつた。そこで庄司などが色々世話を焼き地形普請も出来上つて立派な遊郭が出来た。此の遊郭は中々盛んなものであつて江戸町一丁目二丁目、京町一丁目二丁目、角町など云ふ町があつた。江戸町二丁目は即ち前に話した鎌倉河岸の傾城屋が引越したのである。京町一丁目二丁目は京都六條から来た麴町の遊女屋とそれから追々上方から来た遊女屋の居た處である。角町は京橋の角町から引越したと云ふことであつて、御家人、外様の武士を始め、町人百姓に至るまで入込んで實にひどい繁華であつたさうな。然る處明暦二年になつて奉行所から今の吉原の土地へ引移るやうにと云ふ命令が下つた。吉原の者は随分迷惑をしたが止むを得ないので、何うか來年まで御待ち下さいと云ふ歎願をして其年は暮れてしまふと、翌年正月十八日、例の大火で丸で焼けてしまつたので、其年の六月にすつかり今迄の土地を引拂つて同八月、今の處へ引越した。吉原に通ふことを三谷通ひと云ひ、吉原のことを三谷と云ふのは、今度引越した遊郭は金龍山を目當に淺草川を廻り、駒形堂を後に見て、日本堤を行けば、あさちが原、こづか原など云ふ名所の原が三あるから、それを三谷と云ふのであるなど、云ふ説もある。悉しい事は知らぬ。擬又其時分に遊郭に通ふ風と云ふものは、今から考へれば誠に馬鹿らしいものであつた。其時分吉原で流行た小唄に、

春の日のいとゆふわけて柳たをるは誰々ぞ

しろき馬にめしたるとのごよ

と云ふのがある。其頃の三谷通ひは馬に乗つて出掛けたので、洒落た男は白馬に乗つて出掛けたものと見える。白樂天の詩に、君は白馬に乗つて垂柳に沿ふといふがあるが、恰も當時の吉原通ひの人の爲に歌つたもの、如く思はれる。淺草寺の境内に馬道と云ふ名の残つて居るのは三谷馬の通路であるからであらう。遊女屋では借錢をして人を連れて歸る男をつき馬をつれて歸ると云ふのも、矢張此時分からの言來りであらう。序に申して置くが、前回に談した風呂屋者から出た丹前風と云ふことについて、西鶴の『一代男』には丹前風と申すは江戸にて丹後殿前に風呂ありしとき、勝山といへる湯女がすぐれて情もふかく髪かたちとりなりは袖口ひろく、つま高く萬につきて世の人に替りしより一流始まつて丹前風と云つたとある。其頃湯女の勢ひの盛んであつたことが分るから併せてこゝに記して置く。

其時分の江戸に著しい事は女の少かつた事である。全體江戸と云ふ處は申すまでもなく新開地であつて開府の天正十八年から明暦三年迄たつた六十五年しかたつて居ない。それ故此處の町人は所謂諸國の集り勢であつて、或は親に離れて脛一本よい運勢に當つて大金まうけをしたと思ふ者か、妻子に分れて裸一貫、一仕事仕出して故郷に錦を飾らうと云ふ連中か、それでなくば、京大阪の大町人の出店か、そんなものでなければ集つて來ない處であるから自然男が多くつて、女が少い。それに所謂三百諸侯の屋敷に勤番の國侍と云ふ者はみんな獨身者であるから、一口に云へば其頃の江戸は男所帯であつたと云はねばならぬ。西鶴の書いた本の中に江戸に女の少い事を云つて、長屋作りの切窓より一軒一軒にのぞけば女と云ふものはなかりけりとする。これは少々形容が多いやうであるが免に角女が寡かつた事だけは事實である。斯様に女の少かつた事は、其頃の江戸の風俗が如何にも殺伐で男伊達などの流行つた一の原因である。それで吉原にも

七 切窓 明り取りのために、羽目板・壁などを切り抜いて作つた窓

上方かみがたの傾城町と違つた一の習なまひが出来た。それは遊女が容易たやすく客に昵なじまぬことである。即ち自分の位ゑいを取つてむやみに客に身を許さぬことである。これも實は女の寡すくないからのことである。されば初會はつかいの客などには一向いっかう世辭せじも云はない。たとへば勤つとめの身にしてからが、縁えんなければ心を許すまじきものと云ふやうな顔をしてゐる。客も取付島とけつきしまがないと云ふ具合である。どんなに嘸ほなしても歌つても女郎はそれに浮うかされて氣を移すやうな景色を見せない。そして其儘そのま又の御縁ごえんもあらばと言いひ残のこして立つてしまふ。さながら春の夕暮に山寺を尋ねて花の散るのを詠なめるやうな風情ふうせいで、寂しいやうな心細いやうな心持がしたと云ふことである。これで此頃の遊女に權けんのあつたことが分る。しかし此位このくらゐを取り、權高けんたかであつて、やたらに客の機嫌を取らぬと云ふ事だけは江戸の遊女の外ほかと違つた事であつたが、其外そのほかは上方かみがたと別段違はない許ばかりではない。實は江戸の遊郭は上方の出店であると云つても宜しい。遊郭の講釋あきざなどを餘り多くするのは士君子しくんしに對して愧はづることであるが、其頃の事情あきざを明かにする爲めに、今少し詳しく話さねばならぬ。全體遊女にした處どこが何處どこの女でもかまはない、直すぐに其女を傾城町に連れて來て、其儘遊女にすると云ふことは決して出で來ないことである。殊ことに其頃までの關東女くわんとうをんなといふものは足は平ひらたく、首筋は太く、氣は強く、氣き轉てんは利きかず、申さば天然生れたまゝの野蠻やばんじん人であつたから、とても遊女などにすることは出來ない。それ故始めは上方から連れて來たものである。中には關東のもので名高い遊女になつたものもある。たとへば仙臺侯に關係のあつたと云はれた二代目の高尾たかをは野州鹽原やちうしほらの者であつたと云ふが如きこともある。然しながらたとへ生れた處は何處でも、小さい時から禿かむろと云ふものにして、之に遊女となりて人に事つかふべき色々の教育を授ける。其教育が上方の風ふうに基もといたものであるから、つまりは種子たねは關東でも育ちば上方であると云つて宜しい。情なさけ目づかひ、座配ざくぱりのとりな

し、もたれたる文ふみかく事、其外そのほか色々の手くだなど云ふことは、つまり上方の風が移つたのである。其頃は大名の妾めかけも京都からかゝへたもので、根生ねをひの江戸女といふものは左様さやうな洒落しやれたることには極ごく不向きであつた。されば東男あづまをとこに京女と云ふことは其頃の風俗に善く合つて居る諺である。後には江戸女も京女に優まされるとも劣らないやうな艶えんなものになつた。それから今一つ讀む人に覺えて居てもらひたいことは、其頃の江戸は例の新開地しんかいちのことであるから、大名の家か中も旗本も旅に出て居るものであると云ふ心持が多い。旅の恥はかき棄てと云ふ諺もある位で、旅宿やどじやであると思へば自然行狀ぎやうじやうも謹つつしまないものである。夫故大名それゆゑの三谷通さんやがよひなども多かつた。當時の吉原の客の事を書いた本の中には小判こばんは樹きになる物やら、海にある物やら知らぬ人もあつたと云ふことがある。これは大名の吉原通いひを曰つたものである。水戸黄門光圀みづと卿なども、若い時分には吉原に出掛けられたと云ふことである。